

水木しげる氏

表紙絵

=図書館へ行こう！=

表紙絵：水木しげる

- ・ 特集：図書館員のおすすめSF 2～5
- ・ のぞいてみよう！むかしの図書館 6～7
- ・ 郷土の歴史と伝承 8

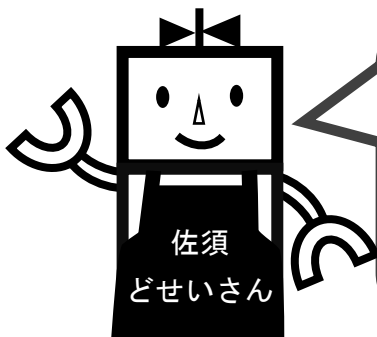
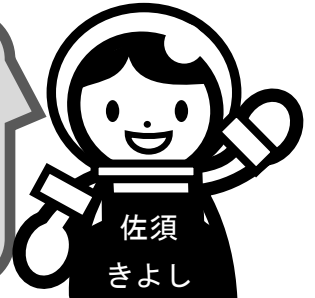
★ 図書館員のおすすめSF ★

ケン・リュウや劉慈欣などの活躍めざましく、盛り上がりを見せているSF小説。映画においても「DUNE/砂の惑星」や「TENET」のヒットなど、隆盛がうかがえます。

とはいえ、「普段SFはあまり読まない」「とっつきづらそう」という方もいらっしゃるのではないのでしょうか。こちらで紹介する図書館員のオススメSFのなかから、お気に入りの一冊が見つかりましたら幸いです。

『まず牛を球とします。』 柞刈湯葉著

牛を食べたいけれど、殺生はちょっと…。じゃあ、細胞を培養して球状の牛を作ればいいじゃない、という社会を描いた表題作ほか、全14編を収録した短編集。著者の奇想天外な発想を手軽に味わうことができます。どの作品もどこかシニカルで、飄々として捉えどころがなく、独特の読後感をもたらします。SF界の「奇妙な味」。

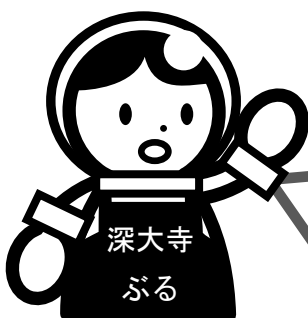
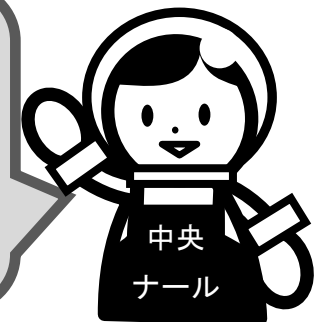


『タイタン』 野崎まど著

AIにより人類が労働から解放された世界。心理学を趣味とする主人公の元に、「機能不全に陥ったAIのカウンセリング」という仕事が舞い込む。明らかになる真実、「働く」ことの意味、AIと人間の交流…。物語の様相は二転三転し、見どころは沢山あるのですが、何よりAI「コイオス」がどんどん愛しく思えてくる。でも「彼に入れ込んで大丈夫だろうか」という僅かな不安も付きまとう。ラストの驚きをぜひ体験してください。

『マイナス・ゼロ』 広瀬正著

個人的には「時間SFの日本最高作品」に推します。直木賞の選考委員だった司馬遼太郎が、高く評した程です。タイムトラベルもので、今読み返すとアイデアは古いと感じるかもしれませんが、日本SFの古典として外せません。戦前の東京風物が綿密に描写されノスタルジックにあふれています。著者は若くして故人となりましたが、時間をテーマにしたSF作品を多く残しましたので、気に入ったら是非他の作品も読んでみてください。



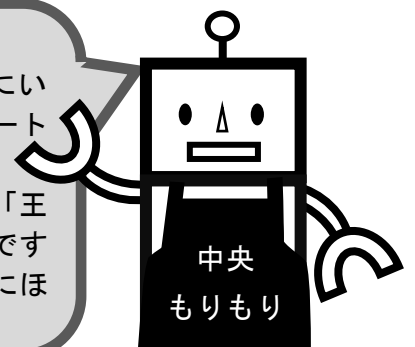
『散歩する侵略者』 前川智大著

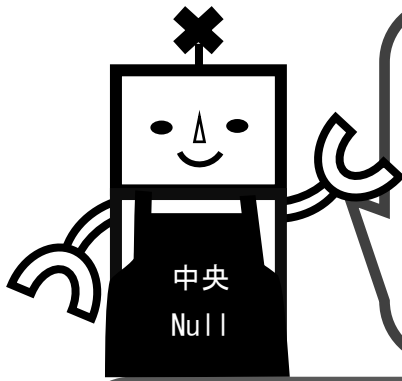
劇団イキウメの主宰・前川氏による同タイトルの舞台の小説化です。舞台の観劇がきっかけでこの本を手に取りました。行方不明だった夫の真治が、まるで別人のように穏やかな性格になって妻・鳴海の元へ帰ってきます。しかしどうも会話が噛み合わず、その頃からその街には不可解な現象が次々起きるようになります。日常と隣り合わせのSF（少し不思議な）作品です。切ないラストにグッときます。

『ショート・トリップ』 森絵都著

子供の頃、図書室で何度も借りて読み、誕生日に買ってもらった。本屋にいる親から「白い本でしょ？星新一の」と電話あり。それはショートショートだ、惜しい、という思い出。

さらっと読める短編集。おすすめは「王様とカメと鈴木くん」。続編の「王様と鈴木くん」ではカメがいなくなっている。「カメはどうなさったんですかい？」「海へもどった」「海ガメだったんですかい？」こんなやりとりにほっこりする。自分のお気に入りを見つけてください。



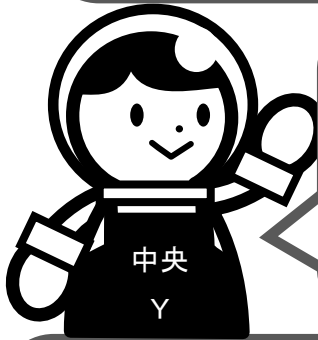
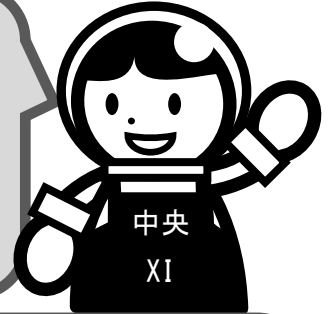


『SFショートストーリー傑作セレクション 時間篇 人の心はタイムマシン／時の渦』 日下三蔵編

江戸時代と現代をつなぐ洞窟が発見されてドタバタ騒動が巻き起こる「御先祖様万歳」(小松左京)、コールドスリープによって引き離された恋人たちの絆を抒情的に描く「美垂へ贈る真珠」(梶尾真治)など、日本SF初期の名作短編を集めたアンソロジーです。10代の読者に向けた編集なので読みやすく、解説も充実しています。この巻は「時間篇」ですが、他にも「ロボット篇」や「未来篇」など、いろいろなテーマの巻があります。

『宇宙消失』 グレグ・イーガン著

太陽系が謎の物質に包まれ、星が見えなくなった未来。元警官のニックは、ある女性の捜索を依頼されます。彼女は重度の脳損傷患者なのに、入院していた病院から何の痕跡も残さず姿を消したというのです。捜索を続けるうち、ニックは思いがけないことに巻き込まれていきます。量子力学をテーマにしたハードめのSFなので難しいところもあるのですが、よくわからなくてもなぜか面白く読めてしまうパワーのある作品です。

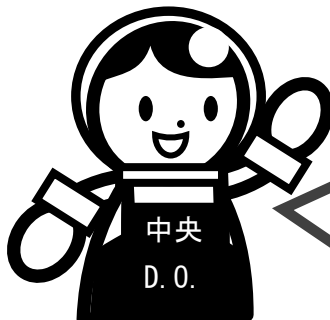
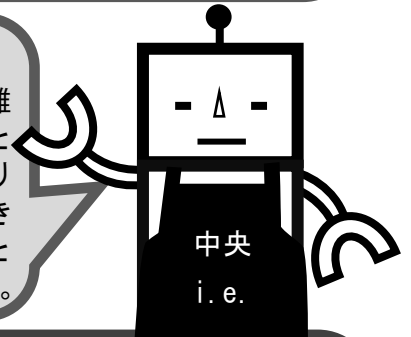


『タイタンの妖女』 カート・ヴォネガット・ジュニア著

時空を超えた存在に運命を操られた男マラカイ・コンスタントの人生を描いた作品……あらすじを一言でいうとこうなりますが、ユーモラスでシニカルな独特の語り口と、荒唐無稽ともいえる予想を超えた展開が組み合わさったこの作品の魅力は、あらすじを説明するだけではとても伝えることができません。この本を初めて読んだ時には、あまりの面白さにしばらくカート・ヴォネガット・ジュニアの本しか読めなくなりました。

『図書室の魔法(上・下)』 ジョー・ウォルトン著

少女の日記形式の小説です。心を病んだ母から逃れて愛するウェールズを離れ、会ったこともない父親のもとに身を寄せた15歳のモリ。新たに通うことになった寄宿学校には、なかなかなじみません。双子の姉妹も失ってひとりぼっちのモリの支えは、大好きなSF小説とある秘密の存在です。あるときモリは学校の近くでSFの読書会が行われていることを知り、参加することにします。1980年頃のイギリスを舞台に、SFが人と人とをつなぐお話です。



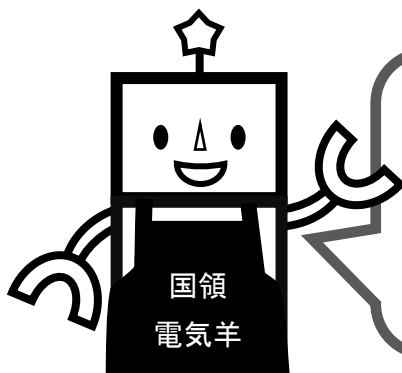
『大地への下降』 ロバート・シルヴァーバーグ著

かつて地球の植民地だった惑星ベルザゴールは、今では象のような現住生物ニルドーロールの手に返されている。植民地時代に地球行政官としてベルザゴールを管理していたガンダーセンは、当時犯した罪を償うため、ベルザゴールに戻ってきた。ガンダーセンはニルドーロールの行う「再生」の儀式に加わるべく「霧の国」を目指し、道中で様々なものを目にする。グロテスクだがどこか美しいベルザゴールの景色や思弁的な内容が魅力の作品。

『夢みる宝石』 シオドア・スタージョン著

大事なびっくり箱人形のジャンキーだけを持って、孤児の少年ホーティは冷酷な養い親の家から逃げ出します。そして逃亡途中で風変わりなカーニヴァルと出会い、美しいジーナを始めとする団員の一人になります。そのカーニヴァルの団長はある不思議な水晶に執着していましたが、実はホーティもその水晶と無関係ではなく……。10代の時に読んでからずっと好きな作品。幻想的で美しい物語で、ファンタジーが好きな方にもおすすめです。





『息吹』 テッド・チャン著

映画『メッセージ』が面白かったので、原作者に興味がありました。この本は 9 篇を収録した短編集です。アラビアンナイト風に描かれるタイムトラベル、人間が出てこない世界で記憶の秘密を探求する科学者の話、並行世界間でコミュニケーションがとれる話など、長さも物語の舞台もテーマも様々です。どの小説も世界観が独特かつ濃密でどっぷりのめり込んでしまいました！

『デューン砂の惑星（上・中・下）』 フランク・ハーバート著

アメリカの作品ですが、SF史上の古典といっても差し支えないです。「ヒューゴー賞」「ネビュラ賞」をダブル受賞しています。封建的な惑星社会の遠い未来を舞台にしていますが、かなり独創的な世界観で書かれています。読んだ当時は、これは哲学書か！と思わせられました。大長編ですのでじっくりと読みたい方におすすめです。映像化は困難と言われていましたが、何度か試みられており、最新では 2021 年に前半が映画化され公開されました。後半は 2023 年の予定です。



『華氏 451 度』 レイ・ブラッドベリ著

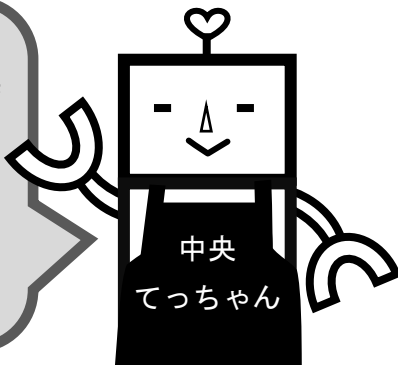
華氏 451 度とは、紙、つまり本が燃える温度です。『華氏 451 度』の世界では、本は善良な市民に有害な情報を与えるものとして、読むことはおろか、所持すらも許されません。主人公のモンターグは、本を燃やす昇火士（ファイアマン）として、誇りを持って仕事をしてきました。ところが、風変わりな少女クラリスとの出会いをきっかけに、自分の仕事に疑問を抱き始めます。

SF作家として名高いレイ・ブラッドベリによる風刺的作品です。「本が燃やされるディストピア」という設定は、本好きの方に刺さるのではないのでしょうか。



『星を継ぐもの』 ジェイムズ・P・ホーガン著

1977 年に発表された著者のデビュー作です。月で信じられないある事実（伏せます）が発見され、謎が謎をよび人類の生い立ちに繋がるハードSFの傑作です。ミステリーの要素も含みストーリー展開が巧みで、読んでいて飽きません。大ヒットしたので、続編も作られましたが単品としても十分に楽しめます。星野之宣さんによって漫画化されましたが、独自の解釈や続編・続々編も含まれているので、別作品としてとらえた方がよいです。余談ですが、続編も本作に劣らない程の驚愕を感じました。



『SF・異色短編（全 4 冊）』 藤子・F・不二雄著

『ドラえもん』でも垣間見えるダークな藤子・F・不二雄が、存分に発揮された短編集です。クセになります！元々は、好きなミュージシャンがバイブルと言っていたのをきっかけに手に取りました。



こちらで紹介した資料は、右のQRコードもしくは下記URLから一覧で見ることができます。

ぜひご予約ください！

<https://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/themacontents?&pid=1824&listid=124>



本ほどの所蔵数はありませんが、調布市立図書館ではDVDも借りることができます。借りられるSF映画のごく一部をご紹介します。

図書館で借りられる！ SF映画

バック・トゥ・ザ・フューチャー

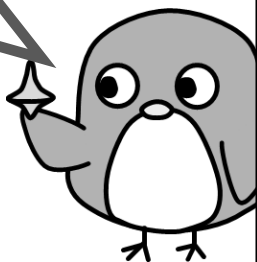
監督：ロバート・ゼメキス

初公開年：1985年

友人の科学者・ドクの作ったタイムマシンに乗り込んだ高校生マーティが30年前の世界へ。そこで出会ったのは自分の母親で…。続編のPART2、PART3も所蔵しています。

ドクの家は『ものぐさトミー』みたいだね。こんなうちにすんでいたら、とってもべんりだねえ。そしてなによりデロリアンがかっこいい!!!ぼくものってみたいなあ～…

夢なのかげんじつなのか
だいこんらん!
ハッピーエンドなのか
バッドエンドなのか…。
どっちなんだろう?



インセプション

監督：クリストファー・ノーラン

初公開年：2010年

主人公は他人の夢の中に潜り込み、アイデアを盗む犯罪のスペシャリスト。仲間と共にターゲットの夢に潜入するが、潜在意識下の亡き妻の影が任務を脅かす…。

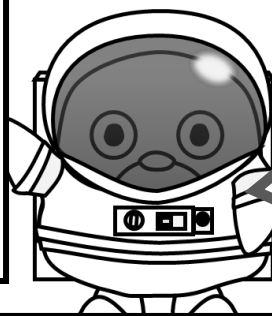
三大怪獣 地球最大の決戦

監督：本多猪四郎

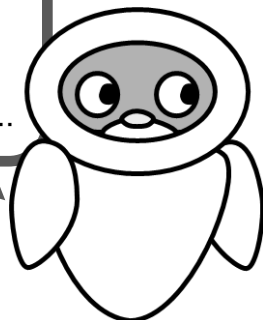
初公開年：1964年

黒部ダムに落ちた隕石から、宇宙怪獣、キングギドラが誕生した!モスラと小美人はラドン、ゴジラに助けを求める…。

4ひきのかいじゅうが
だいしゅうけつ!キング
ギドラは かわいいけど、
かっこいいよね!!
みんなは だれ推し?



ウォーリーも イヴも
とっても かわいい!
700ねんも ひとりで
ごみの しより なんて、
ぼくには できないなあ…



ウォーリー

監督：アンドリュー・スタントン

初公開年：2008年

誰もいない地球で、ひとりで黙々と働き続ける健気なロボット・ウォーリー。ある日、地球に真っ白なロボット・イヴが現れる。イヴの気を引こうとするウォーリーだが…。



こちらで紹介した資料は、左のQRコードもしくは下記URLから一覧で見ることができます。ぜひご予約ください!

<https://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/themacontents?pid=1824&listid=125>



のぞいてみよう！

むかしの図書館

むかしの

今年で50周年!

宮の下分館

開館日:1972年7月24日



開館に向けた準備の様子



開館初日の宮の下分館



カウンターは大混雑!

むかしの

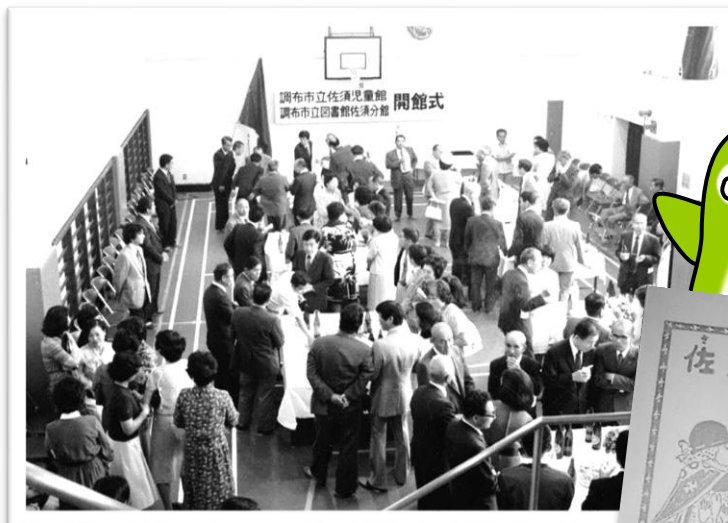
今年で40周年!

佐須分館

開館日:1982年6月5日



開館式当日の佐須分館



開館式は1階の児童館で行われました

人がいっぱい!!



開館時に配っていたチラシ▶

おかしの 今年で20周年!

調和分館

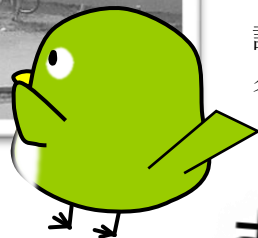
開館日:2002年7月30日
旧つつじヶ丘分館(1970-2002)



神代団地にあった旧つつじヶ丘分館
開館当日の様子



つつじヶ丘分館のすぐ近く、野川小学校の跡地に
調和小学校が建設され、1階が図書館になりました。
名前はつつじヶ丘分館から調和分館になりました。



むかしの図書館 もったのぞいてみると...

No.		
貸出券		
氏名	年令	才
住所	方 TEL()	
職業	男 女	
学校名	学部	
	年 組	
調布市立中央図書館		
TEL (82) 1171 内線289		
TEL (82) 1186 但土曜・日・夜日曜祝日		

No.	
かじだしけん	
なまえ	男 女
ところ	TEL()
がっこう	小 学 校 年 組
調布市立中央図書館	

電算化する前は、利用者は
貸出券を使って本を借りていました。

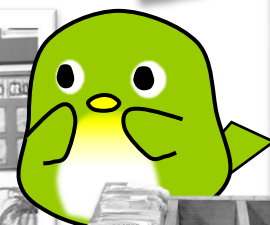
かじだし もうしこみしょ	
No.	
なまえ	と し て
じゆうしよ	す
がっこう	小 学 校
まいるえん	ま い く え ん
おしりあて	ち ょ う ふ し り つ つ じ ヶ 丘 分 館
おのりあてのなまえ	

パソコンがなかったので、
貸出しや返却の管理は
手作業でした。
電算化したのは1992年からです

ぴゅうたがなかったので
目録を使って本を探して
いました



佐須分館にあった目録ケース。
児童室の手前側に置いてありました



1988年ごろの
旧つつじヶ丘分館のカウンター



調布の醸造業と村の暮らし

関口 宣明 のぶあき

1) 多摩川を利用した醸造業

調布の南部を流れる多摩川は、古くから清流で知られ、川沿いに住む人々は、飲用水をはじめ、アユ漁などで大きな恩恵を受けてきました。また、良質で豊かな川の水や、流域の地下水は、酒や醤油の醸造にも適し、江戸時代から、調布周辺の村々で利用されていました。

江戸時代後期になると、交通網の発達とともに、物資の流通も活発になってきました。そこで甲州街道を行き来する旅人だけでなく、地域の住民向けに酒や醤油を醸造する人々が徐々にあらわれました。かみいしわらしゆく上石原宿（現在のうらわ上石原地区）では、江戸中期の1686年に酒造が始まったという記録が残っています。酒などの醸造には、広い敷地に蔵を建て、穀物を発酵させる大きな仕込み桶などの設備がいります。



さらに職人を雇ったり こじま小島地区の醤油蔵 するために財力が必要なので、醸造の事業ができる人は、ほとんど村の名主などの有力な農民に限られていました。

2) 醸造仲間の交流

醸造業が活発になるにつれ、技術を教え合ったり、塩、空き樽などの必要物資を江戸から取り寄せたりするなどの仕事を協力し合うため、一村を超えた醸造仲間が交流するようになりました。

上石原宿で、酒造りを始めた、屋号を「たまがわくら玉川蔵」という家では、文化4（1807）年に、醸造の守り神である松尾神社（府中大国魂神社内）に商売繁盛を願って、10軒の醸造仲間とともに、石鳥居を奉納しました。

この時の仲間は、川崎の登戸、府中の押立、おしたて稲城の長沼、世田谷の宇奈根など、ほとんどが多摩川沿いの場所で醸造蔵を運営していた人たちです。

3) 暮らしを潤した川の恵み

上石原地区では、「玉川蔵」の主人が、弘化3（1846）年の伊勢参りで求めてきた切溜きりだめ※（煮染などの料理の入れ物）や、酒、そばつゆを注ぐ湯桶などの漆器が地区の冠婚葬祭の時にも使われました。農村のふだんの食生活では、おかずの味付けといえば、味噌や塩が主で、醤油は、祭りや祝い事のごちそう作りにだけ使う貴重なものでした。



こうして多摩川の水を使った醸造業が発達することで、地区の祭りに皆で濁酒を酌みかわす楽しみや、婚礼にも醤油を使う煮物、手打ちそばを食べて祝う風習に一役買うなど、地域の結びつきを強める支えとなりました。

濁酒や醤油を買う人が増えてきた明治から大正にかけて、飛田給、旧上布田、かみふだ小島、国領、旧金子にも醸造店ができ、酒、醤油などを安価で販売しました。ちなみに昭和13年頃には、濁酒一升の値段は60銭ほどで、清酒（並）の半額でした。その頃になると都市化の影響で、水質が落ちはじめ、地酒、醤油造りはしだいに行われなくなりましたが、大切な資源である多摩川の水を活かした産業の一つとして、地域の食生活向上に大きな役割をはたしてきました。

※この切溜は調布市郷土博物館に展示されています。
参考文献：『調布市史中巻』および『調布市史民俗編』

刊行物番号

2022-105

図書館だより 第264号

令和4年9月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>